中学校における生徒の場所の想起と居場所の選択に関する考察

A STUDY ON THE STUDENT'S REMEMBRANCE OF IMAGE SCENERY AND SELECTION OF PLACE IN JUNIOR HIGH SCHOOL

常陰有美*, 倉斗綾子**, 新田佳代***, 上野 淳****
Yumi TSUNEKAGE, Ryouko KURAKAZU, Kayo NITTA
and Jun UENO

The purpose of this study is consideration about junior high school as living space through investigation into student's remembrance of image scenery and selection of space.

Main result shows as follows.

- 1) Space composition have a great influence on student's remembrance of image scenery and selection of space.
- 2) Student's favorite space is difference from space where they really stay.
- 3) Various space and equipment make student's living activity diverse.

Keywords : Junior High School, remembrance of image scenery, selection of space, Rest Time

中学校, 場所の想起, 居場所選択, 休み時間

1. 背景と目的

中学生は心身ともに大きく成長を遂げる多感な時期にあり, その多くの時間を中学校において過ごす。彼らが中学校という空間をどのようにイメージ, 認識し, 実際にどのように居場所を選択しているかは, 興味深い課題であり, 中学校を計画する上でも重要なテーマとなりうると考えられる。

教科教室型運営やメディアスペースを基調とした中学校計画に対する関心が高まる中で, 中学校空間における居場所選択に着目した既往論文も散見できる。この中には, 中村・西村らによる居場所と行動特性に着目したもの^{註1)}や, 瀧山・西村らによるホームベースにおける居場所形成に着目したもの^{註2)}などが挙げられる。しかし, それらは学校空間を部分的に捉えたものや行動現象としての生徒の居場所選択を捉えたものが多く, 生徒の視点から見た中学校空間に対する認識等の全体像を捉えた研究は少ない。本稿では, 生徒が学校空間全体についてどのように認識し, 実際にどのように休み時間の居場所を定めているのかを調査・分析し, 生活環境としての中学校空間の在り方を考察することを目的としている。

2. 調査概要

本研究では中学校の建築形態を在来的な片廊下型平面を基調と

する従来型, オープンなメディアスペースを教室まわりに配するメディアスペース型(以下;MS型)の2つに分類する。また運営方式を, 特別教室型(以下:特教型), 教科教室型(以下:教科型), 従来型校舎の余裕教室を工夫して活用することで部分的に教科教室型運営を実現させている一部教科教室型(以下:一部型)の3つにそれぞれ分類する。これらの観点に学校規模の条件を加味して, 調査対象校として, 特教型・従来型より小規模校のMrとMg, 大規模校のTa, 教科型・MS型より小規模校のOm, 大規模校のSe, そして一部型・従来型で小規模校のNkの計6校を選定した(表・1, 2)。これら対象校に全校生徒を対象とした場所の想起や休み時間の居場所選択に関するアンケート調査と, 生徒の休み時間の過ごし方の実際を把握する観察調査の2つの調査(表・3)を実施し, 各校の比較及び分析を行った。アンケート調査では, 実施した6校より全学年1133名の回答が得られ, うち有効回答数は1130(99.7%)であった。

3. 中学校空間に対する生徒の場所の想起

3.1. 場所の想起

アンケート調査では, 生徒に「お気に入りの場所」, 「嫌いな場所」, 「ひとりで過ごす場所」, 「仲の良い友達と過ごす場所」の4項目につ

* 岡岡村製作所 修士(工学)

** 首都大学東京大学院建築学専攻

COE リサーチフェロー・博士(工学)

*** ㈱三菱地所設計建築設計部 修士(工学)

**** 首都大学東京大学院建築学専攻 教授・工博

Okamura Corporation, M. Eng.

Research Fellow, Graduate School of Architecture, Tokyo Metropolitan Univ., Dr. Eng.

Mitsubishi Jisho Sekkei Inc., M. Eng.

Prof., School of Architecture, Tokyo Metropolitan University, Dr. Eng.

表1 調査対象校一覧

学校名 (略号)	Mr. 目黒区立第六中学校	Mg. 目黒区立第五中学校	Ta. 杉並区立高井戸中学校
開校/竣工年	昭和22年	昭和22年	昭和22年/平成10年
所在地	東京都	東京都	東京都
校地	50L (1-2-2)	60L (2-2-2)	140L (5-4-5)
生徒数	138名	147名	526名
運営方式	特教型	特教型	特教型
建築形態	従来型	従来型	従来型
規模	小規模	小規模	大規模
調査	小規模校ならではの、丁寧な教育を目指している。選択授業やT.T.等をカリキュラムに取り入れている。	選択授業や少人数学習を豊富に取り入れ、生徒の個性や進度に合わせたカリキュラムに取り組んでいる。	多目的室や特別教室を利用した少人数授業や、併校の地域図書館を利用した特徴のある授業を展開している。
主要階平面			
建築的特徴	南側に教室が並べられた片廊下型校舎。特別教室は東西側に配置されている。余裕教室が多く、更衣室や多目的室として利用している。	Mrと同様にコの字の校舎の南側に教室が並べられている片廊下型校舎。特別教室の配置も、同様に東西の側に集約されている。	教室棟と特別教室棟が2Fの覆り廊下で繋がっている。教室棟には、多目的スペース、特設室等、教室以外にも生徒の活動の場が設けられている。
観察調査	○	○	○
学校名 (略号)	Nk. 横浜市立西金沢中学校	Om. 大洗町立南中学校	Se. 聖籠町立聖籠中学校
開校/竣工年	昭和22年	昭和22年/平成12年	平成13年
所在地	神奈川県	茨城県	新潟県
校地	30L (1-1-1)	60L (2-2-2)	150L (5-5-5)
生徒数	57名	207名	456名
運営方式	一部型	教科型	教科型
建築形態	従来型	MS型	MS型
規模	小規模	小規模	大規模
調査	少人数教育の利点を活かすため、一部教科教室型やランレームなどを設けている。	習熟度別や課題別等、生徒個人に合わせた少人数学習・T.T.を多く取り入れ、学習集団の展開も順調。	クラス・H組の組み合わせにより、多様な学習集団を展開。時間割編成にも運営に合わせた独自の取り組みをしている。
主要階平面			
建築的特徴	2Fの南側に教室が並べられ、3角形校舎の中央には中庭がある。余裕教室が非常に多いため、3Fの教室を教科教室として利用している。	3つの棟が中庭を囲んで配置されている。H組は教科教室と隣接しており、一体的な利用も可能。教室はオープンなものが多く、MSと連続している。	8の字型校舎に、地味な交差橋と体育館が付属している。H組と教科教室は独立しており、全員着席可能な広さのH組が2Fに集約されている。
観察調査	○	○	○

表2 調査対象校分類

	学校規模		運営方法			建築形態	
	大	小	特教型	一部型	教科型	従来型	MS型
Mr		●	●			●	
Mg		●	●			●	
Ta	●		●				
Nk		●		●		●	
Om					●		●
Se	●				●		●

表3 調査概要

アンケート項目	観察調査
中学生の視点より、場所の想起や休み時間の過ごし方を把握する。	第三者の客観的な視点より、休み時間の過ごし方(場所・行為集団)を把握するマッピング調査。
1. お気に入りの場所及びその選択理由	
2. 嫌いな場所及びその選択理由	
3. 一人で過ごす場所及びその選択理由	
4. 仲の良い友達と過ごす場所及びその選択理由	
5. 授業時間外における滞在場所及び行為内容	
6. 昼休みにおける滞在場所及び行為内容	
※以上の項目はすべて複数回答とする

図・1 選択場所の有無

■ある □なし

いて、校舎平面図上に図示させる調査を行っている。この場所に対する想起の有無の割合をMS型・教科型のOm校、Se校と従来型・一部型のNk、従来型・特教型のMrの4校について図・1にまとめた。「嫌いな場所」、「ひとりで過ごす場所」、「仲の良い友達と過ごす場所」の3項目については、運営方式や建築形態による有意な差異は認めることはできない。しかし、「お気に入りの場所」については、従来型では「ある」と答えているものが50%内外であるのに対し、教科型・MS型のOm校では、これよりも有意に高いことが指摘できる。空間設定のあり方が場所の選択性に影響を与えるひとつの傾向であると考えられる。また、「ひとりで過ごす場所」の有無についてみると、全体の約3分の1ほどの生徒がこのような場所を意識していることがわかる。

3.2. 場所想起の分布

それぞれの項目に、校内のどのような場所が想起されているのかの実際を、MS型であるSe校と従来型であるMr校について図・2に分布図として示した。また校内諸スペースを表・4のように分類した上で、各項目についてどのような場所が想起されているのかを、6校について、その割合を集計すると図・3のようになる。

1) お気に入りの場所の分布

建築形態による顕著な差は認められず、校内に広く分布している。

また学年ごとの明確なすみわけは見られず、各場所に複数学年が混在する。このような特徴から、生徒は学年ゾーンに限られることなく、それぞれ自分のお気に入りの場所を見つけているものと思われる。

2) 嫌いな場所の分布

建築形態による明確な差は認められない。教室やHBは選択されにくく、特別教室や教科教室を選択する生徒が多い。その主な理由としては、教科に対する好き嫌いなどの個人的事情や、汚い・臭いなどといった衛生的要素に関する不満があげられる。

3) ひとりで過ごす場所の分布

MS型のOm、Se校では、校内にまんべんなく分布しているが、Mg、Mr校などの従来型校舎では、教室・教室まわりと動線空間、トイレに分布が集中している。トイレを選択している生徒のほとんどが教室近くのものを選択しているため、これを教室まわりと捉えたと、分布は教室・教室まわり及び動線空間に二極化していると言える。

4) 仲の良い友達との場所の分布

クラスルーム(以下:CR)やHB及びその隣接空間が想起されるため、学年ごとの領域のはっきりと区分される傾向にある。MS型のOm、Se校では校内各所に分散する傾向があるが、Nk、Mg、Mr校などの従来型校舎では、ほとんどの生徒がCRを選択してお

図・2 選択場所の分布（主要階における）

り、建築形態による差異が認められる。またT a校では、一部動線空間に椅子が設置してあり、広いオープンスペースのように設えられているため、教室や教室まわりからあふれ出た生徒が動線空間に多く滞在するという傾向が見られた。

4. アンケート調査からみる休み時間における生徒の居場所と行為

本章では、アンケート調査をもとに2時間目と3時間目の間の休み時間（以下；授業間休み）と昼休みの居場所の選択と行為について考察を行う。

4.1. 休み時間における生徒の行為

生徒の休み時間の行為内容を表・5に示すように分類した。そのうち授業準備と個人の休息、その他の3つの大分類に着目し、アン

表・4 場所の分類

a. 教室・H B等	——	所属する集団の拠点・集団の占有がある教室・場所
a'. 教室・H Bまわり	——	aに隣接する空間（廊下、テラス等。施設・雑室は含まない）
b. その他教室	——	集団の占有のない教室
b'. その他教室まわり	——	bに隣接する空間（廊下、テラス等。施設・雑室は含まない）
c. O S及びM S	——	学習・生活スペースの目的でつくられたオープン・メディアスペース
d. その他	——	体育館や図書室など 職員・保健スペース 校庭 その他屋外空間 W C
e. その他動線空間	——	主に教師が主体となって使用する場所 授業を受ける場所ではない屋外空間。a'に属さないテラスも含む。
	——	廊下（幅員4m以下の通路）、階段

ケート調査を実施した全6校の授業間休みの行為内容の割合を示した（図・4）。教科型のOm校では約60%の生徒が授業準備をしていたと答えているのに対し、特教型のMr・Mg・Ta校や一部型のNk校では約10～30%ほどである。教科型の場合、授業間休みの多くを次の時間の場所への移動や準備に使っていることがわかる。SeはOm同様、教科型運営であるが、授業間休みが20分と

設定されているため、授業間休みを休息時間として利用することができていることがうかがえる。

また昼休みにおいては、授業間休みと異なり、授業準備をしている生徒はほとんどなく、人や物を介在とした休息行為を行っている生徒が大半を占めている。

4.2. 滞在所の分布

授業間休みを実際にどこで過ごしたかを尋ねた結果の割合分布を図・5に、また昼休みにおけるその分布を図・6にそれぞれ示した。

①授業間休み

主にCR・HBでの滞在が多く見られる。教科型のOm校、Se校では、授業場所が他の教室にも及ぶため、滞在所の分布もHBとその他の教室（教科教室及び特別教室）に二極化している。これは以下の2点に起因するものと考えられる。1) HBが授業準備のための立ち寄り場所として有効に使われていること、2) 授業が教科教室や特別教室で行われる教科型では、次の授業の場所で過ごす生徒が多いということ。

一部型であるNk校でも、OmやSeと同様の傾向が見られる。一方、ほとんどの授業がホームルーム教室で行われる特教型のMr、Mg、Taでは、滞在所はCRのみに集中している。これらの特徴から、授業間休みでは、次の授業が行われる場所で過ごしている場合が多く、滞在所は運営方式に強く関係していると思われる。

②昼休み

MS型のOm、Se校では滞在所が校内のいくつかの場所に分散していることがわかる。一方、従来型であるMr、Mg、Ta、Nk校では「CR及びCRまわり」と「その他の諸室と動線空間」に二分されており、昼休みの滞在所は建築形態に強く関係していると言える。MS型における教科教室や特別教室は、単に授業が行われる場所としてだけでなく、生活活動の場としても一定の役割を果たしている。しかし、従来型では休み時間になると特別教室が施設されてしまう場合もあり、生徒たちにとって特別教室は生活の場として認識されていないことがわかる。

4.3. 昼休みにおける滞在所と生活行為の関係

全対象校のうち、MS型・教科型のOm校、従来型・特教型のMr校、従来型・一部型のNk校の3校を抽出し、昼休みの行為内容の大半を占める個人の休息行為と滞在所の関係を図・7に示した。いずれの学校でも、CRやHBでは、友達との会話が多く見られ、CR・HBが友達と過ごす場所となっていることがわかる。MS型校舎のOm校では友達と会話をする場所がHBにとどまらず、その他教室

や諸室にまで広がっており、MS型校舎における場所の選択性の高さを示していると言える。従来型校舎であるNkでは廊下に椅子やPC、書籍を置くなどの工夫をしているため、動線空間においても物を介在とした行為を行う生徒の滞在が見られた。また同じく従来型校舎のMrでは全体的にあまり設えが充実していないものの、一部廊下にPCを設置しており、その場所における物を介在とした行

表・5 休み時間の行為の分類

分類	具体的内容
授業準備	場所移動、授業に必要なものを取りに行く
個人の休息	ひとりで過ごす、ぼーっとする等
会話	友達と話す、話し合い、じゃんけん等
じゃれあい	遊ぶ、ふざける、おにごっこ等
私物遊び	読書、勉強、携帯電話、ゲーム等
設備利用	PC、教材利用、楽器利用等
その他	無回答

図・4 授業間休みにおける生徒の行為

図・5 授業間休みにおける生徒の滞在所

図・6 昼休みにおける生徒の滞在所

図・7 昼休みにおける人・物を介在とした行為と発生場所との関係

為が見られた。このことから、従来型校舎においても設えを工夫することなどにより、無機的な空間に場所性が生まれ、生徒の場所の選択性を高めることができると考えられる。

5. 観察調査から見た休み時間の生徒の居場所と生活活動

Mgを除く5校^{※3)}では、昼休みにおける生徒の居場所について、観察・マッピング調査を行っている。本章ではこの調査に基づいて、昼休みの生徒の滞在場所、行為内容、集団規模について考察を行う。

5.1. 生徒の居場所領域とその展開の分析

生徒の昼休みの居場所の分布について2事例を図・8に示す。さらに表・4に示した分類毎に生徒の場所別の分布割合を算出した(図・9)。

従来型・特教型では生徒の滞在の6割以上がCRとCRまわりに集中し、残り4割弱の生徒が、図書室などの諸室、または動線空間に滞在していることがわかる。従来型・特教型では、図書室、体育館など書籍や備品のある諸室での滞在が多い。MS型・教科型では、校舎内全体に分布が広がっており、各自が自分なりの居場所を見つけて滞在していることがわかる。日常的に授業のため場所を移動しているため、行為や教材・備品などのために場所を選択することが習慣化していると推察できる。またアンケート調査に基づいた図・6と比較してみると、分布に相違が見られる。これは、観察調査が第三者の視点によりある時間断面で校内の滞在分布を捉えているの

に対し、アンケート調査では中学生の主観的視点により回答しているため、最も多く滞在した場所や目的となる場所を選択しているためであると推測される。

学年・クラス毎の滞在を見ると、従来型・特教型の場合、学年により領域が明確に分かれ、他学年と交わることはほとんどないことが読みとれる。一方、MS型・教科型では、HB以外で居場所領域が学年別に分かれることはなく、直接的、間接的な学年間の交流が日常的に起こっていることがわかる。各運営方式で共通に見られる特徴としては、1) MS、OSでは学年や利用集団によるテリトリーが発生しやすい、2) コーナー性のある空間や、PC・学習資料などの設備が備わった場所・諸室では、異なる学年や集団が混在するケースが見られる、3) 使用頻度の低い諸室周りには、休み時間生徒の滞在が少ないが、一部、人の多い場所を避ける生徒の居場所となる場合がある、などがあげられる。

5.2. 居場所の分布と行為内容・集団規模の関係

次に、集団規模を1人、2～3人、4～6人、7人以上の4つに分類し、休み時間の生徒の行為内容と集団規模の関係を分析した(図・10)。集団の人数に着目すると、全ての学校で休み時間を1人で過ごす生徒が見られ、行為内容は休息・私物利用に続き、書籍やPCなどの備品・教材利用が見られた。いずれの学校も、2～6人の集団で会話や私物遊び・じゃれあいなどを楽しむ生徒が多い。7人以上の集団形成は全体的に少ないことがわかる。

図・8 休み時間の行為と場所との関連

行為と居場所の関係を見ると(図・11), 会話や私物遊びを中心とした静的な遊びは, CR・HB及び教科教室などで多いことがわかる。一方, じゃれあいなどの動的な遊びは, CR・HBまわりやその他の動線空間など, 広いスペースが確保できる場所で行われる傾向にあることがわかる。教材・備品利用はその他諸室やMSで多く見られ, 設えによって行為や滞在者数が異なっている。校内の各スペースに本やPC, 教材を充実させているSeやOm, Nk校ではそのような物を介在とした行為が多く見られる。しかし, 設えがあまり充実していないMrやTa校では教材・備品利用をする生徒はあまり見られず, 友達と話すなどしながら昼休みを過ごしている生徒が多く見られた。休み時間の生徒の居場所は, 行為や目的, 必要なスペースに応じて適宜選択されていると解釈することができる。

6. まとめ

本研究で得られた知見を以下にまとめる。

- 1) 生徒各々は「お気に入りの場所」を学年ゾーンや普段授業で使用する場所にとらわれることなく選択しているため, 必ずしも彼らが実際に過ごす場所と一致するとは限らない。しかし, 全体的な傾向として, 建築形態や運営方式に関わらず, 教室やHBに対する生徒の意識は高く, 特に, MS型校舎で設定されているHBは, 生徒のお気に入りの場所であると同時に実際に過ごす場所になっている。
- 2) 生徒の実際の居場所は建築形態に影響を受け, MS型校舎では場所の選択性が高く, 自分たちの行為内容に合わせて場所を選択しやすい環境にあるといえる。このようなことから生徒の活動に対応する多様な空間を校内全体に点在させることが望ましいと考える。
- 3) 生徒が実際に過ごす場として選択する場所は, 日常授業で利用する領域を超えない場合が多い。しかし, CR・HB以外にもPCや書籍・遊具など, 教材や備品利用が可能な場所は居場所として選択される。よって生徒の場所の選択性を高めるためには, 多様な場を用意するだけでなく, カリキュラム内での積極的な利用や設えの充実など, 運営側の工夫も必要とされる。
- 4) 休み時間の生徒の活動は多様であり, 生徒はそれぞれの活動に適した場を選んで滞在している。従って, より充実した生活活動の

ために, 様々なしつらえや場・空間を設けることが望ましい。

注

注1) 中村拓郎, 西村伸也, 鈴木一也: 居場所選択に見る生徒の行動特性について—打瀬中学校(教科教室型)・聖竜中学校(特別教室型)のケーススタディその1—, 日本建築学会大会学術講演梗概集E-1, p255, 1999

注2) 瀧山大介, 西村伸也, 大屋信孝: ホームベースにおける生徒の居場所形成に関する研究教科教室型へ移行したS町立S中学校におけるケーススタディ, 日

図・9 昼休みにおける生徒の滞り場所

		休息 ぼーっとする 景色を眺める 読書など	会話 おしゃべり 話しかけ じゃれあふなど	じゃれあい 遊ぶ・ふざける おにぎり ダンスなど	私物遊び 読書・絵画 携帯ゲームなど	設備利用 PC・教材利用 大ホール 南校利用など
Om	1人	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●
	2~3人	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●
	4~6人	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●
	7人~	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●
Se	1人	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●
	2~3人	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●
	4~6人	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●
	7人~	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●
Mr	1人	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●
	2~3人	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●
	4~6人	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●
	7人~	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●
Ta	1人	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●
	2~3人	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●
	4~6人	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●
	7人~	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●	●●●●●●

図・10 昼休みにおける生徒の生活行為

図・11 昼休みの行為と場所との関連

本建築学会大会学術講演梗概集 E-1, p71, 2003

注3) M g 校では調査実施日が特別時間割であったため、昼休みが掃除時間に変更されており観察調査が実施できなかったため。

参考文献

- 1) 新田佳代, 星野賢司, 倉斗綾子, 上野淳: 中学校における時間割運用の実態に基づいた教科別必要教室数の算定について 中学校の建築計画に関する研究 その1, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1, p25, 2004
- 2) 星野賢司, 新田佳代, 倉斗綾子, 上野淳: 教科教室型中学校における教室・メディアスペースの使われ方について 中学校の建築計画に関する研究 その2, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1, p27, 2004
- 3) 星野賢司, 倉斗綾子, 山田あすか, 新田佳代, 上野淳: 中学校におけるカリキュラム・時間割の実態からみた教室整備に関する研究—新学習指導要領に対応した教科別必要教室数の算定—, 日本建築学会技術報告集 第20号 p239, 2004
- 4) 新田佳代: 学習・生活活動の実態からみた中学校の建築計画に関する研究, H16年度東京都立大学大学院修士論文
- 5) 登坂壮人, 新田佳代, 倉斗綾子, 常陰有美, 上野淳: 中学校における生徒の学習・生活活動の実態 中学校の建築計画に関する研究 その1, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1, p179, 2003
- 6) 新田佳代, 登坂壮人, 倉斗綾子, 常陰有美, 上野淳: 中学校における集団の編成と展開の実態 中学校の建築計画に関する研究 その2, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1, p181, 2005
- 7) 常陰有美, 新田佳代, 倉斗綾子, 上野淳: 中学校における生徒の場所の想起と居場所の選択に関する分析, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1, p183, 2005

(2005年9月10日原稿受理, 2006年3月1日採用決定)